

『ベトナムにおける「共同体」の存在と役割 ——現代ベトナム農村開発論』

竹内 郁雄 編著

国際領域 主任研究官 岡江 恭史



『ベトナムにおける「共同体」の存在
と役割——現代ベトナム農村開発論』
編著／竹内郁雄
出版年／2022年
発行所／明石書店

本書は、現代ベトナム農村開発における市場を補完するインフォーマルな制度としての「共同体」の役割について考察しています。

第一部では、北ベトナム（特に紅河デルタ地域）における耕地問題を分析しています。アジア有数の人口稠密地帯である同地域では、労働集約的稲作農業が発達し、それは小規模な家族経営農家によって担われてきました。各ムラは、公田と呼ばれる村落共有田を住民に定期的に均等に割り当てていました。筆者によれば、公田制度は農業リスクを分散させる合理的な制度でありました。しかし北ベトナム政府は1950年代から農業集団化を推進し、農家は農業合作社という集団農場の指令の下で耕作に従事することになりましたが、農業生産活動は停滞しました。筆者によれば、この失敗は統制経済による非効率だけではなく、そもそも労働集約的小規模稲作農業が展開されてきた地域に資本集約的な大規模農業による発展は不適合であり、さらに60年代からの緑の革命が水利網の未整備というリスク下で遂行されたにもかかわらず、公田制度のような伝統的なリスク分散の仕組みも破壊してしまったことが一層問題を大きくしました。こうした危機を乗り越えるために、ベトナム政府は80年代から農業生産の過程を農家世帯に請け負わせ、さらに90年代には合作社が管理していた耕地も農家世帯へ分配されることになりました。その際、多くのムラでは多数の零細圃場を家族成員数に比例して分与する方法が取られましたが、この零細分散錯圃的な均等主義的耕地分与方式は公田制度と同様にリスクの分散を実現する合理的な方法であるといえます。さらに2000年代に入って政府は、分散錯圃を解消するために交換分合を進めました。ここでも水利網の整備によって稲作のリスクを低減させない限り、交換分合を実施することが困難なムラが多かったのです。

第二部が分析対象とする南ベトナムのメコンデルタ地域は、第二次大戦後長らく西側陣営に属し、北ベトナムより市場経済と大規模農業も発達しており、現在輸出米の主産地でもあります。そのため、

2000年代以降の大規模農地建設及び農民・企業間の連携という政策の中心地域でありました。しかし企業との連携に供されてきた耕地

面積は同地域の10%程度で頭打ちとなっています。農民にとって主な販売先は個人商人です。商人は、取引する農民の農産物生産に係る事情を熟知しており、農産物の収穫・買付・搬送等の各工程も迅速に執り行うことができますので、農民にとっては企業との契約よりは煩わしくない（取引費用が低い）というメリットがあります。筆者によれば、農民・商人間の長期継続的・多面的関係たる「共同体」が形成されており、情報の不完全性を緩和し農民の経済厚生を改善し得る制度として機能していることになります。第三部では、ハノイやホーチミン市といった大都市への人口移動において、家族・親族のネットワークが、情報の不完全性・非対称性という問題を改善する役割を果たしていると論じています。

本書における事例や考察については、評者自身の現地調査の結果とも符合し納得のいくものですが、いくつか気になる点もあります。第一に、本研究が基本的に既存文献資料の理論的整理によるものであり、新たな事実の提示が少ないことです。第二に、筆者による「共同体」の捉え方です。第一・三部における地縁・血縁を基にした協力的行動はまさに「共同体」そのものですが、第二部の農民・商人間の関係まで「共同体」と捉えていいのでしょうか。筆者自身も述べているように、一人の農民と取引をする商人は複数おり、また商人の多くが華人であるという点も、共同体の要件である排他性・同質性に合致していないと思われます。

ともあれ、本書は社会関係資本（Social capital）がベトナム農村開発に果たす役割について網羅的にまとめており、当該分野における今後の研究のベースとなる研究書であるのは間違いのないと思います。